

氏 名 蔡 娟
学 位 博士（中国言語文化学）
学 位 記 番 号
学位授与年月日
審 査 研 究 科 外国語学研究科
論 文 題 目 宋代白話文献における動補構造の総合研究
論 文 審 査 委 員 (主査) 大東文化大学教授 丁 鋒
（副査）大東文化大学教授 高橋 弥守彦
（副査）大東文化大学教授 濱戸口 律子
（副査）早稲田大学教授 古屋 昭弘

蔡 娟 博士論文 審査報告

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

2 本論文の要旨及び研究成果

本論文の構成

本論文は以下の全八章全二十六節から構成され、目次は以下の通りです。

第一章 序 論

第一節 テーマの選択と研究目的

第二節 研究理念と研究方法

第三節 論文の構成

第四節 記号の説明

第二章 宋代白話文献と研究現状

第一節 諸文献と文献別先行研究

第二節 時代区分による先行研究

第三節 小論の研究方向

第三章 動補構造の認定と分類

第一節 現代中国語における動補構造の認定と分類

第二節 宋代白話文献における動補構造の認定と分類

第四章 宋代白話文献における「V+C」動補構造

第一節 「V+C」結果式

第二節 「V+C」可能式

第三節 「V+C」方向式

第五章 宋代白話文献における「V+P+C」動補構造

第一節 「V+得+C」動補構造

第二節 「V+取+C」動補構造

第三節 「V+却+C」動補構造

第四節 「V+將+C」動補構造

第六章 宋代白話文献における動補構造の共時研究

第一節 「V+C」動補構造

第二節 「V+得+C」 動補構造
第三節 「V+取+C」 動補構造
第四節 「V+却+C」 動補構造
第五節 「V+將+C」 動補構造

第七章 宋代白話文献における動補構造による通時研究

第一節 「V+P+C」 動補構造における文法標識の変遷

第二節 「V+C」 動補構造における客語の位置変遷

第三節 動補構造用法の変遷

第四節 動補構造における補語語彙の変遷

附録 1：宋代と現代中国語“普通话”の動補構造の類型比較

附録 2：現代中国語“普通话”における宋代各類型動補構造の保留状況

第八章 結論

言語資料

参考文献

本論文の内容と評価

第一章の序論では主に研究課題に関する目的、理念と方法などについて述べています。本論文は動補構造（述語動詞と補語により構成された構造）、口語に近い白話文献、宋代という三つのキーワードを軸として、宋代口語の動補構造の全容解明（共時的研究）及び前後の時代との関連解明（通時的研究）を研究の目的として設定しました。また、客観的な言語事実に基づいて研究を展開することが研究理念であり、「形式と意味」、「描写と比較」、「共時と通時」、「全数調査とサンプル調査」をそれぞれ結びつけることを研究方法としています。中国語史研究法の基本を守りつつ、資料の分析に適した多面的かつ複眼的な方法論を採用したことが本論文の特長であり、研究成果を導き出す前提ともなっています。

第二章は資料論であり、本論文が研究データとして利用している文献を禅宗語録、宋儒語録、史籍、諸宮調などに類別して詳細に紹介、成立年代が確かに口語性の高い文献だけを厳選して利用する姿勢が研究結果に信頼性を齎しました。特に本論文は今まで先行研究あまり扱われてこなかった文献（『景德伝燈録』『碧巖録』『河南程氏遺書』『統資治通鑑長編』『揮塵録』『建炎以来系年要録』など）を研究資料として取り上げ、新しい言語現象の発掘に繋げました。

第三章は研究対象の定義・分類です。複数の先行研究の見解の中から、本論文では朱徳熙（1982）の名称（述補構造）を採用、宋代の動補構造を「V+C」動補構造（V、動詞 verb；C、補語 complement）と「V+P+C」動補構造（P、文法標識 partical）に二分、更に前者を結果式、可能式、方向式に分類し、後者を「得、取、却、將」などの文法標識により9類型に分類しました。この12類型は宋代動補構造の基本形式であり、このような統語構造による分類は、今まで主流を占めていた語義分析による分類よりも本質を捉えたものと判断され、高く評価されます。

第四章と第五章は宋代動補構造研究の本論ともいべき部分であり、「V+C」動補構造と「V+P+C」動補構造における各類型が分析されています。具体的には、客語（object）の場所、意味特徴、肯定否定、文法標識の類型と有無、動詞や補語の語彙分布状況、補語や動詞の音節数分布状況など多方面から動補構造の各類型を逐一分析検討し、比較・再分類しつつ、綿密且つ周到に纏めました。扱われた例文（動補構造部分に日本語訳付）は480個に上り、論証過程に堅実な言語事実を提供しています。

第六章は動補構造の使用状況を宋代白話文献のジャンル別（禅宗語録、宋儒語録、史籍、諸宮調）に分析して、その共通点と相違点を整理したもので、第四・第五章とは違う角度からの共時的研究です。結論として明らかになったことは以下のとおり：（1）「V+C」動補構造は全文献に亘って見られ、既に全般的に定着している。（2）禅宗語録と宋儒語録は、他の文献より「V+得+C」の用例が多く、口語性がより強く、表現の自由度が高い。（3）史籍材料は簡潔明瞭な表現のため、また諸宮調は台詞の長さによる制限のため、共に口語性が低く、動補構造の用例が少ない。

第七章は通時的研究です。文法標識の変遷、客語の位置変遷、方向式と可能式の変遷、補語語彙の変遷など四つの側面から、唐代から宋代、そして宋代から現代まで動補構造の変化を幅広く探究した内容となっています。宋代から現代標準語までの間に動補構造には大きな変容が見られますが、附録部分も含め、明らかになった現象は以下のとおり：①宋代の12類型の動補構造のうち現代では5類型しか残っていない、②「V+P+C」動補構造の結果式と方向式はすべて消失、③「V+C」動補構造の結果式と可能式、「V+P+C」動補構造の可能式及び「V+得+C」様態式も、その一部の用法が消失、④現代標準語の全ての動補構造が既に宋代白話文献に存在。

第八章は結論であり、本論文の研究成果を21項目に纏めました。その中、二音節や多音節動詞の多用、補語成分の多様化、複数の動補構造による同一意味の表現、同一の動補構造で異なる意味の表現、頻繁に使用される動補構造の形式化と単語化、南北方言における補語類型の相異点の存在など宋代動補

構造の特徴を解明し、注目すべき結論を引き出しました。また、宋代の12類型の動補構造が現在の5類型に減少した主因を、「得、将、取、却」などの文法標識の虚詞化（接辞化）、「異形同義」構造の統一、助詞体系の内部調整など3点に帰納しました。参考に値する見解だと言えましょう。他にも、北方方言の動補構造は南方方言の動補構造より変化が早い、“動詞拷貝構造”（動詞重複構造）の発生が「VOC」分離式動補構造の衰退原因となった、「V+C」構造の客語が述語動詞後から補語動詞後に移動する現象は補語が述語動詞と接近した結果である、などの指摘も貴重です。

審査委員からの評価と改善意見（要約）

宋代の動補構造を全面的に掘り下げ、大量の言語事実を駆使して、文法構造の由来を明らかにした功績は大きい。このテーマの範囲内で言えば完璧に近い詳細な労作である。通時研究は更に展開する必要があるが、現段階で一定の結論を出したことが評価される。先行研究の引用は多いが漏れもあり、また、自分の考えと一致しない先行研究にも触れるべき。繁体字と簡体字の表記に多少問題あり、修正必要。

また、通時研究は多少足りないから、「総合研究」の総合性は少し弱い感じがして、今後に残る課題です。

以上のような改善点の指摘を受けて、先行研究の補充と表記上の修正について論文再提出までに完了させるよう指導しました。設定した研究目的は十分に達成されており、本論文は課程博士の学位請求論文として十分な水準を有していると判断できます。

3. 結論

以上の審査内容、評価に基づき、本論文を審査対象とする学位論文審査委員会は、全員一致をもって、本論文は博士（中国言語文化学）の学位を授与するに値するものと判断し、ここに報告します。

以上

学術論文		
平成	22年3月	「《老乞大》四版本述補結構對比研究」 『外国語学会誌』第39号 大東文化大学外国語学会
平成	22年3月	「《老乞大》解説と《老乞大新釋》の補語嬗變初探」 『外国語学研究』第11号 大東文化大学大学院外国語学研究科
平成	24年3月	「《碧岩录》动补结构特点及“V+得+将+C”趋向式的历史演变」 『語学教育研究論叢』第29号 大東文化大学語学教育研究所
平成	24年3月	「宋代中国語白話文献における動補構造」 『外国語学研究』第13号 大東文化大学大学院外国語学研究科
平成	24年3月	「《劉知遠諸宮調》中的動補結構」 『中国言語文化学研究』創刊号 大東文化大学大学院外国語学研究科中国言語文化学専攻
平成	24年12月	「“舍不得”と“不舍得”的史的考察」 『研究会報告第32号 国際連語論学会 連語論研究（I）』 日本語文法研究会
平成	25年3月	「宋代白話文献における動補構造の“将”—《碧岩录》、《朱子语类》を中心に—」 『中国言語文化学研究』第2号 大東文化大学大学院外国語学研究科中国言語文化学専攻
平成	25年10月	「宋代白話文献における動補構造の“得”—動態助詞と構造助詞を中心に—」 『中国語研究』第55号 白帝社
平成	25年12月 (刊行予定)	「戦後日本における近世中国語動補構造研究の現状—述語動詞に後置される“得”的論述を中心に—」 『研究会報告第34号 国際連語論学会 連語論研究（II）』 日本語文法研究会
		口頭発表
平成	23年7月	「《碧岩录》中的动补结构及其特点」 第一回国際シンポジウム、大東文化大学大学院外国語学研究科中国言語文化学専攻主催（於：大東文化大学板橋校舎中央棟多目的ホール 7月2日）
平成	24年2月	「“舍不得”と“不舍得”について」 連語論研究大会、鈴木康之グループ連語論研究会主催（於：大東文化会館ホール 2月4日、5日）
平成	24年10月	「复合趋向补语结构中宾语后移的演变时代」 日本中国語学会第62回全国大会、日本中国語学会主催（於：同志社大学京田辺キャンパス 10月27日、28日）
平成	24年11月	「宋代白話文献における動補構造の“将”—《碧岩录》、《朱子语类》を中心に—」 第四回国際シンポジウム、大東文化大学大学院外国語学研究科中国言語文化学専攻主催（於：大東文化大学板橋校舎 11月17日）
平成	24年12月	「宋代白話文献における動補構造の“得”—動態助詞と構造助詞を中心に—」 中国近世語学会2012年度研究集会、中国近世語学会主催 (於：愛知大学東京事務所 12月8日)
平成	25年2月	「戦後日本における近世中国語動補構造研究の現状—述語動詞に後置される“得”的論述を中心に—」 国際連語論学会設立大会、鈴木康之グループ連語論研究会主催（於：大東文化会館ホール 2月9日、10日）
		以上